



茶臼山にて(2008年4月)

「不思議な縁が多くて、動かされているんやなと思う。鎧を汚すような真似はできない」。大坂の陣で名を馳せた武将、真田幸村(信繁)に畏敬の念を抱き、手作りの甲冑姿で大阪城の清掃活動などに励むNPO法人大阪城甲冑隊の河井計実さん。「昔の侍は刀で時代を変えたけれど、私たち“21世紀の侍”はごみばさみで世の中を変える」と使命感に燃えている。

大阪城に「赤備え」誕生

ものづくりと歴史が好きで、その延長で刀や槍などの武術をマスター。さらに火縄銃の勉強もしようと市民団体「大阪城鉄砲隊」に所属していた。2003年夏には(財)大阪観光コンベンション協会主催の「紙で作ろう よろいかぶと制作体験教室」の講師をすることになった。

広く一般に開講する教室のため、工作技術の優劣に左右されることなく完成できることが大前提である。「持っている戦国時代の兜をばらしてゴムでかたどり、設計に試行錯誤を繰り返した」。制作工程を編み出すまで3年を要した。教室には主に歴史好きの老若男女が集まり、頭成兜(ずなりかぶと)と桶側二枚胴具足(おけがわにまいどうぐそく)を作っていく。全12回の教室では自宅に持ち帰っての宿題もあり、各自ぴったり体型に合った甲冑を完成する。幸村の朱塗りの部隊「赤備え(あかぞなえ)」の誕生である。

戦にも通用する本格甲冑

完成品を見ても、本物と見分けがつかない。「かぶとの頭部を覆う部分だけグラスファイバーを使い、ほかはすべて紙できている」というから驚く。細部にわたるまで徹底的にこだわって、「博物館に飾っても分からない」という本格的なものだ。

紙製にこだわるのは「紙なら子どもでも作れ、非常に軽いので実際に着て動ける」から。体にぴったり合ったものを作るため、一日中着いても疲れない。戦国時代にも紙製の甲冑はあり「たとえ日本刀で斬りつけられても大丈夫」という。

せっかく作ったものをきちんと活用してもらうために、持ち運び易さも考慮。市販のスーツケースにぴったり収まるよう計算されている。「参加者も中途半端な甲冑だったら続かない。紙といっても、すべてが本物。だから一生懸命やってくれるのだと思う。みんな意識が高い」

大阪活性化の一翼に

教室は大坂の陣があった夏と冬に開講し、これまでに5歳から80歳までの140人が自前の甲冑を完成させた。そのうちの50人で、毎月第3土曜に大阪城でごみ拾いを行っている。「観光客は外国人も多く、彼らは『大阪城に侍があった』と大騒ぎ(笑)。大坂の陣で亡くなった人たちへの慰霊の気持ちもこめて続けている」

昨年は初めて自主イベント「大阪の陣慰霊祭」を開き、茶臼山で(とき)の声を上げて天王寺駅周辺でごみ拾いを行った。幸村の生まれ故郷・長野県上田市や幸村が隠棲した和歌山県九度山町、真田十万石の城下町・松代(長野市)との交流も進む。

今の世の中には「真田の武士道こそ必要」と、甲冑教室だけでなく講演活動にも力を入れる。「甲冑は方法論で、真髄は心。“逃げない、卑怯なことをしない”という幸村の精神を伝えていきたい」。幸村ゆかりの地で生まれ育った縁を大切に思い、「全力投球するお役目があるのかな」と腹を固める。

(文・江中咲紀 / 表紙写真・高島悠介)

甲冑姿で大阪に 活力もたらす

プロフィール

NPO法人「大阪城甲冑隊」理事長

かわ い かず み
河井 計実さん



大阪府藤井寺市出身、46歳。大阪府の特別非常勤講師(情報教育)、神社仏閣や歴史を得意とするライターなどとして活躍。現在、東放エインターテイメントスクール大阪校・創作アート講師。2003年から大阪城甲冑隊理事長。

ホームページ
<http://www.south.ne.jp/osakajo/>